

**グローバル化と日本経済**  
**ーヒト、モノ、カネ、社会共通資本ー**  
Globalization and the Japanese Economy  
- People, Goods, Money, and Social Overhead Capital -

**矢野 誠 (Yano Makoto)**  
京都大学・経済研究所・教授



研究の概要

本研究プロジェクトでは、日本経済や世界経済に対するグローバル化の影響を、人的資本、財、貨幣、社会共通資本など、さまざまな側面から、理論的・実証的に分析し、大きな成果を挙げてきた。今回の世界金融危機もグローバル化に遠因が求められ、その意味でも我々の視点の重要性が立証されている。今後は、そうした側面からの研究も推進する。

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・理論経済学

キーワード：経済理論、日本の所得、資産分布の動学的分析

**1. 研究開始当初の背景**

20世紀の後半以来、著しい速度でグローバル化が進展しており、学術的にも、その功罪について絶え間なく議論がなされてきた。これを受けて、本研究プロジェクトは、グローバル化の功罪を、経済のさまざまな側面について、効率性や公正性、公平性の観点から、複雑系理論、実証分析、シミュレーション分析などを駆使して、経済学的に分析しようという問題意識から出発した。

**2. 研究の目的**

2008年秋のリーマンショックで顕在化した金融危機を通じて、不幸にして、我々の問題意識がきわめて時宜を得たものであることが実証された。一方で、グローバル化により、情報や財の国際的な移動コストが大幅に低下し、1990年代、世界経済は未曾有の成長を遂げた。他方で、アメリカの不動産バブルを通じて生み出されたサブプライム・ローン問題を、世界の金融市場全体における、クレジット・デフォルト・スワップ(CDS)に代表される、生証券の過剰供給に転換し、世界規模の金融危機を演出したのもグローバル化である。

大恐慌以来といわれる深刻な経済危機を受けて、「グローバル化と発展・安定」および「グローバル化と分配の公正性」の解明という本研究のテーマの方向性の

正しさを確認した。同時に、世界金融危機の危急に鑑み、今後は、「グローバル化と経済危機」を中心的テーマに加え、研究を行っていく。

過去10年以上にわたって、矢野が提唱してきた「市場の質理論」は、このような目的の達成のために極めて有効であるというのが我々の見方である。この理論では、一般に技術進歩は市場を支えるべき制度を現実の市場のあり方から乖離させ、「市場の質」を大きく低下させ、それが経済危機を創出するとされる。本プロジェクトでは、今後、この理論を金融危機との関連で立証していくことを具体的な目標の一つとする。

**3. 研究の方法**

金融危機を受け、新たに加えられたテーマで研究を行うと同時に、当初設定した多数の研究テーマのうち、金融危機の説明に直結する危急のテーマから順次、研究を進めていく。

世界金融危機は、グローバル化によって、各国市場における景気循環の連動性を高めたことに起因する。景気循環の連動性については、Nishimura and Yano (1993) の先駆的業績が知られている。本研究では、当初の研究計画を拡張して、(1)多数の国の間に外部性を通じた相互依存関係がある場合の景気循環の連動性や(2)期待の変化によって起きる景気循環の振幅の大きさ、(3)経済危

機の周期的発生に対する経済制度のあり方といった問題も含めて、複雑系やシミュレーションなどの手法を使って分析していく。また、当初、中心的テーマと設定していた、グローバル化と所得分配の関係というテーマも、金融危機により、一層重要性を増しているという認識に基づき、理論・実証分析を進める。

#### 4. これまでの成果

本プロジェクトにおける研究成果は、当初の研究テーマに関して、幅広い成果を挙げた。以下では、その主たるものを紹介する。矢野は Yano and Honryo (2010) など3本の論文において、法制度を当初計画にある「社会共通資本」としてとらえるという見方を展開し、グローバル化の進む経済における競争法の国際間協調の可能性を分析し、大きな成果を上げた。競争法の国際間強調の問題は法律の分野では広く取り上げられている。しかし、本来は、経済学的モデルを利用して、ゲーム理論的視点から分析されるべきものともいえる。そのような取り扱いは既存の経済学では行われたことがなく、本プロジェクトの成果は、この分野の先駆的業績と評価できる。

また、西村と矢野は Nishimura, Venditti, and Yano (2009, 2010) など、2本の論文で外部性が存在する経済における景気循環の国際連動性の説明を行った。西村、新後閑、スターハースキーは、Benhabib, Nishimura, and Shigoka (2008) や Nishimura and Stachurski (2009) において、均衡の複数均衡やサンスポット均衡の存在を取り扱った。こうした貢献は期待と景気循環の関係を解明する上で大きな貢献とみなされている。柴田は Ono and Shibata (2010) などにおいて、資産市場の国際的統合が進んだ経済における貿易パターンの研究で大きな業績を残した。照山と矢野 (2010) は労働市場の制度と市場の質に関する実証研究によって、近年の制度的改革によっても、なかなか向上に向かわないわが国の市場の質を実証的に跡付けることに成功した。この研究は、市場の質という新しい概念の最初の実証分析と位置づけることができる。

#### 5. 今後の計画

本研究では、計画当初の研究をさらに深め、同時に当初予期しなかった研究テーマについ

て、さらに、研究を深める計画である。

「グローバル化と経済危機」の分析という、すでに具体化した新たなテーマとともに、社会・経済における一般的な危機を、複数の主体の意思決定における負のコーディネーションと捉えて、それを複雑系によって分析しようという問題意識が本プロジェクトを通じて生まれつつある。こうした問題意識に基づく研究は、自然科学系で生まれた複雑系科学と社会人文科学で培われえた意思決定科学を結ぶ大きな学際的研究につながる可能性も持つということができる。

このようなテーマは、本研究プロジェクトを通じて生まれてきた、世界でも類のない革新的で、独創的な問題意識に基づいている。その全体像については、スペースの制約もあり詳しくは説明できないが、今後の研究はその大きなテーマの一環としてバランスをとりながら進めていく予定であり、着実に前進させ、真に国際的な研究に育てていくことが必要と考えている。

#### 6. これまでの発表論文等

##### ○をつけた5つの論文を載せる。

Makoto Yano and Takakazu Honryo, "Trade Imbalances and Harmonization of Competition", *Journal of Mathematical Economics*, March 2010, Forthcoming.

Jess Benhabib, Kazuo Nishimura and Tadashi Shigoka, "Bifurcation and Sunspots in the Continuous Time Equilibrium Model with Capacity Utilization", *International Journal of Economic Theory*, Vol.4 No.2, pp.337-355, 2008.

Kazuo Nishimura and John Stachurski, "Equilibrium Storage with Multiple Commodities", *Journal of Mathematical Economics*, 45, pp.80-96, 2009.

Yoshiyasu Ono and Akihisa Shibata, "Time Patience and Specialization Patterns in the Presence of Asset Trade", *Journal of Money, Credit and Banking*, Vol.42, No.1, pp.93-112, 2010.

照山博司・矢野誠, 「競争上公正性から見た我が国の労働市場の質—正規・非正規労働市場の垣根に関する実証分析」, 樋口美雄 他(編)『日本家計行動のダイナミズム [VI] 経済危機下の家計行動』慶應義塾大学出版会, 近刊.

ホームページ等

[http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/yano\\_project/](http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/yano_project/)  
KibanS/